

選挙カンパニアと選挙綱領について

選挙を、なによりも人民の政治的啓蒙の仕事として評価する社会民主党にとっては、もちろん、選挙と結びついたすべての宣伝と煽動の思想的＝政治的内容の問題が、基本的な問題である。これはほかならぬ選挙綱領の問題である。その名にいくらかでもふさわしいあらゆる政党にとって、選挙綱領は、選挙のはるか以前から、すでにあたえられたものとして存在している。それは、「選挙のために」わざわざ案出されたものではなくて、ある歴史的時期における党の事業全体から、党活動の在り方全体から、党の方向全体から、不可避免的に生ずるものである。ロシア社会民主労働党にとっても、選挙綱領はすでにあたえられている。選挙綱領はすでに現存している。それは、党の諸原則と戦術とによって、当然かつ不可避免的に規定されている。この戦術は、ある点ではいつも選挙によって「決算」がつけられる人民の政治生活の全時代を通じて、党がすでに決定して、すでに実行してきたし、またいまも実行しているものである。ロシア社会民主労働党の選挙綱領は、革命的マルクス主義と、あくまでそれに忠実だった先進的労働者層とが、1908～1911年の時代に、反革命の荒れくるった時代に、「6月3日目的」、「ストルィピンの」体制の時代になしとげた活動の総括である。

この総括には、三つの主要な基本的構成要素がはいっている。それは、(一) 党の綱領(プログラム)、(二) 党の戦術、(三) 支配的であるか、もっとも普及しているか、あるいは民主主義と社会主義にとってもっとも有害な、当面の時期の思想的＝政治的諸潮流にたいする党の評価である。綱領がなければ、ありとあらゆる情勢の転換にもかかわらず、つねに方針を堅持することのできる多少ともまとまった政治的組織体としての党は、ありえない。当面の政治情勢の評価にもとづき、こんにちの「難問題」に正確な答をあたえる戦術方針がなければ、理論家のサークルはありえても、行動する政治体はありえない。「活動している」、現在問題となっている、もしくは「流行の」思想的＝政治的諸潮流にたいする評価がなければ、綱領も戦術も「空文」と化する恐れがある。そのばあいには問題の核心を理解したうえで、[なにがどうなるか]ということを理解したうえで、綱領と戦術の各箇条を実行にうつし、無数のこまかい、具体的な、いな、もっとも具体的な実践上の諸問題にそれを適用することは、とうてい考えられないのである。

1908～1911年の時期に特徴的な、また社会民主党の任務を理解するうえでとくに重要な、思想的＝政治的潮流についていえば、ここで第一位にあげられるものは、**反革命的な自由主義的ブルジョアジーのイデオロギー**(カデット党の外交家たちがなんと言おうとも、カデット党の政策と完全に一致するイデオロギー)としての「道標主義」と、労働運動と接触をたもっている人々のあいだにみられる、おなじく退廃的・ブルジョア的な影響の現れとしての**解党主義**である。民主主義から後退すること、大衆運動からはさらに遠く、革命からはさらに遠く後退すること——これが「社会」を支配している政治思想の諸傾向の基調である。非合法党からの逃避、解放闘争におけるプロレタリアートのヘゲモニーという任務からの逃避、革命をまもりとおすという任務からの逃避——これが、機関紙『ナーシャ・ザリヤー』と『デーロ・ジーズニ』に巣くうマルクス主義者のあいだの「道標主義」の基調である。視野の狭い実利主義者、すなわち現在の困難な時代に革命的マルクス主義

をまもるための困難な闘争につかれはてて、それに背をむけようとしている人々がなんと
言おうとも、ストルィピン時代における前述の諸「思想傾向」の深さと意義をおよそ理解
することなしに、社会民主党の活動のどの分野でも、宣伝家と煽動家が正確で完全な答を
あたえることができるような、「実践上の」問題、社会民主党の非合法活動と合法活動の
問題は一つもない。

社会民主党の選挙綱領の終りに、当面の政治的实践におけるもっとも根本的な諸問題を
押しだし、全面的な社会主義の宣伝を展開するのにもっとも便利な、もっとも身近なきっ
かけと材料をあたえるような、簡潔な一般的スローガン、選挙標語をかかげることは、多
くのばあい有益であり、ときには必要でもある。現代にとってこのような標語、このよう
な一般的スローガンとなりうるものは、つぎの三つの項目だけである。すなわち、(一)
共和制、(二) すべての地主の土地の没収、(三) 八時間労働日がそれである。

第一の項目のなかには、政治的自由の要求の真髓がある。われわれは宣伝・煽動で革命
の経験を考慮にいれなければならないのであるから、この種の問題についてわが党の立場
を言いあらわすのに、このあとの用語〔政治的自由〕か、あるいは、たとえば「民主化」
などという、そのほかのどれかの用語にとどまることは、正しくはあるまい。……

この争う余地のない抽象論から、具体的な二十世紀のロシアの君主制について結論をひ
き出すことは、歴史的批判の要求をばかにし、民主主義の事業を裏切るものである。

わが国の状態と、わが国家権力の歴史——とくに最近 10 年間の——とは、ほかならぬ
ツァーリ君主制こそ、黒百人組的な地主（その第一人者はロマノフ）の徒党の集中点であ
ることをわれわれにはっきりとしめしている。この徒党は、ロシアを、ヨーロッパだけで
なく、またいまではアジアにとっても恐ろしい妖怪に仕立てあげてしまい、官吏の横暴、
略奪および公金横領、「庶民」にたいする系統的な暴行、政敵にたいする迫害と拷問、等
々を、いまやまったく比類のない規模にひろげたのである。わが君主制がこのような**具体
的な**様相、具体的な経済的基礎と政治的相貌をもっているときに、政治的自由をめざす闘
争の中心にたとえば普通選挙権の要求をおくことは、日和見主義というよりも、むしろお
よそ無意味なことであると言うべきであろう。もし選挙運動の一般的スローガンとして、
諸要求の中心点となるべきものを選定することが問題であるなら、種々の民主主義的要求
を、多少とも真実に近い見通しと釣合いとで配列しなければならない。実際、教養ある人
々の笑いをまねくことなしに、また無教養な人々の頭を混乱させることなしに、プリシケ
ヴィチから婦人にたいする礼儀正しい態度の承認と、「卑猥な」文句をつかうことがよく
ないという認識とを、イリオドルから寛容を、グルコとレインボートから無欲と誠実を、
トルマチョフとダウンバッゼから順法精神と法治体制を、ニコライ・ロマノフから民主主
義的改革を、もともとめようと努力することはできないのだ！

第 17 卷 P286~289 『選挙カンパニアと選挙綱領について』
『ソツィアル・デモクラート』第24号 1911年10月18 (31) 日

ポイント

選挙綱領は、選挙のはるか以前から、すでにあてえられたものとして存在している。それは、「選挙のために」わざわざ案出されたものではなくて、ある歴史的時期における党の事業全体から、党活動の在り方全体から、党の方向全体から、不可避的に生ずるものであり、これまでになしとげた活動の総括である。

この総括には、三つの主要な基本的構成要素がはいっている。それは、(一) 党の綱領(プログラム)、(二) 党の戦術、(三) 支配的であるか、もっとも普及しているか、あるいは民主主義と社会主義とにとってもっとも有害な、当面の時期の思想的=政治的諸潮流にたいする党の評価である。綱領がなければ、ありとあらゆる情勢の転換にもかかわらず、つねに方針を堅持することのできる多少ともまとまった政治的組織体としての党は、ありえない。当面の政治情勢の評価にもとづき、こんにちの「難問題」に正確な答をあたえる戦術方針がなければ、理論家のサークルはありえても、行動する政治体はありえない。「活動している」、現在問題となっている、もしくは「流行の」思想的=政治的諸潮流にたいする評価がなければ、綱領も戦術も「空文」と化する恐れがある。

民主主義から後退すること、大衆運動からはさらに遠く、革命からはさらに遠く後退すること——これが「社会」を支配している政治思想の諸傾向の基調であり、この諸「思想傾向」の深さと意義をおよそ理解することなしに、社会民主党の活動のどの分野でも、宣伝家と煽動家が正確で完全な答をあたえることはできない。

社会民主党の選挙綱領の終りに、当面の政治的实践におけるもっとも根本的な諸問題を押しだし、全面的な社会主義の宣伝を展開するのにもっとも便利な、もっとも身近なきっかけと材料をあたえるような、簡潔な一般的スローガン、選挙標語をかかげることは、多くのばあい有益であり、ときには必要でもある。

現実の生活が、具体的な様相、具体的な経済的基礎と政治的相貌をもっているときに、共和制の要求ではなく普通選挙権の要求をおくことは、日和見主義というよりも、むしろおよそ無意味なことである。しかし、共和制の要求は、ニコライ・ロマノフから民主主義的改革をもとめようと努力している教養ある人々の笑いをまねくことなしに、また無教養な人々の頭を混乱させることなしには、もっとも無知な百姓に説明することなしには、実現できない。

労働者民主主義派の選挙スローガン

……だから彼(解党派…青山)らは、ただもう国会に選出されたいために、なんでも約束することを辞さないのである。

そういうことをしてはならない。そういう行動をするのはブルジョアだけである。労働者民主主義派は、選挙まえに何年も主張され、選挙では百回目にくりかえされるにすぎない綱領、決議、戦術、スローガンだけを信用する。ところでこうした決議をぬきにして、ただ選挙のためにだけになんの意味もない「政綱」を案出する人は、なんの信頼にもあたらない。 第18巻 P182『ペ・ベ・アクセリロードは解党派をどう暴露しているか』

1912年7月末に執筆